

泥棒とイーダ

第04回 この向こう側へ

牧田真有子

文化祭当日はこれといった理由もなく学校にたどりつけなかった。イベントの一環として美術部がワークショップを行うとかで、部員である史乃とは顔を合わさずに済む日だったのだが、私の自転車はくねくねと遠回りをつづけた拳句、あらぬ方角へ走り去った。十一月も後半だというのに夏のように蒸し暑かった。私がファミリーレストランでざるそばを啜っていたその真昼、沼男は飛び入り参加した演劇部の舞台上で喝采を浴びていたらしい。棒読みすぎて大迫力だった、あれほど文化祭を謳歌した人もいまい、とチカが翌日私に教えてくれた。女子からの人気もうなぎのぼりらしいよ。彼女は可笑しそうにそう付け加えた。

担任が「話し合いますようか」と小声で誘ってきたのはその二、三日後の放課後だった。

学期末に行われる個人面談と同じ体裁で、縦に連ねた二つの机を挟んで差し向かいに座った。電灯は消されたままだ。教室は薄茶色い光の底にあった。柿森先生は机の上で両手の指を軽く組み合わせていた。ジャケットの袖の折り返しに長い列車の模様がプリントされている。おとなしいがおどおどしたところがなく、どこへだって一人で行ってしまいそうな彼女に、よく似合っていた。彼女は言った。

「勝見さんは長村さんのことどう思ってるの？ 自ら望んで彼女の言いなりになってるように見えるけど」

私は列車から先生の顔を視線を移した。列ごとに配るプリントの枚数を毎度まちがえる柿森先生に、私と史乃の区別がついていただけでも意外なくらいだった。

「ちよっと勝見さんびっくりしすぎ。そういえばこないだ私が授業で出

した宿題。長村さんはあなたのレポートを奪ったんでしょ？ 名前だけ書き換えて提出してたけど、字が違いすぎだって。まあいいや、とにかく私は当面、様子を見るに留めるつもりだったんだけど」

担任の淡い声とはるかな遠雷の音が入り混じって、私は耳を澄ませた。この教室の壁掛け時計は少し遅れている。

「でも最近あなたのことで私に相談に来る生徒がいてね。見て見ぬふりをつづけるのは辛いつて。その人にとっては、あれはれつきとしたいじめなわけ。正面切って仲裁に入れない自分が許せないみたい」

意表をつかれ、私は膝の上で組んでいた指を無意識にほどいてしまった。沼男やシロの、他人どうしの関係には決して手を出さない様式に慣れすぎていた。急に喉が渴いた。私は平たい声で訊いた。

「自ら望んで言いなりになってるように見えますか。長村さんのことが、怖いことは怖いんですけど」

「でも避けようと思えば避けられるものだっていうのは、見ればわかる、私はね。だから最初は勝見さんて変わった趣味だなと思ってたんだけど、あなた恍惚こうごとしてるわけでもないんだよね」

軽く押すようなまなざしをこちらに向けて、彼女は続けた。

「この頃のあなたって相当なもんでしょ？ それが、長村さんといるときだけ、しゃんとするっていうか。たしかに不安そうなんだけど、以前の勝見さんが不安がってるときの顔に戻るっていうか。どうしてなの」

私は机の下で手のひらを擦り合わせた。「ほらレポート」、苛々とそう言っつて突き出される史乃の手のひら。「早く」と急かしてあゆみ寄る歩幅。色白でしとやかな彼女には、抜きんでた長身を感じさせないところがある。攻撃されて初めて、この人は私よりいぶん大きいんだなと実感した。腕も長い。ローファーもごつい。他ならぬこの自分だけに振り向けられる力は、私たちの間の距離を潰す。潰れた距離は糊のりに似た質感だと、思った。

「長村さんといるときだけは、たしかに世界にくつついていてみたいで」

ぼそつと私は言った。そうだ、史乃と顔を合わせないからこそ文化祭の日は学校に来る意味がなかったのだ。柿森先生は短く力強い鼻息をつき、椅子の背にのけぞった。

「夏の面談では、まだ考えてませんって言ったけど、進路どうするの」「まだ考えてません」

「じゃ考えなくていいから今すぐ決めなさい。はい五、四、三、二、一、」

机の天板を手のひらで景気よく叩いている。私はしどろもどろになる。「医学部進学でも高卒で紙漉き職人の弟子入りでも、何でもいいからとにかく一つ決めるのよ。で、その道を、そうね、あらゆる紙を触りまくる、工房で話を聞く、体験講座で紙を漉く、人と紙の歴史について調べる、伝統工芸の現況と展望について調べる……今ここにいる自分に可能な最大限の手段で厳密に観察するの。それがあなた自身についての正しい現状認識につながると思う。なりたいのはこれじゃない、とわかったらその時点で変えればいい」

「これ以上私は私のことばかり思いたくないですけど」

「思わなくていいから知りなさい。勝見さんは、あなたと長村さんの濁った交流を私が見てたことだって知らなかったでしょ？ あなたのことで見当外れに胸を痛めて、持たなくていい罪悪感を持つてる人の存在も知らなかったでしょ？ 長村さんを利用して自分のために、さっきまで知らなかったでしょう？」

「とんだ小悪党だと思います」

私はショックを受けた。担任はにやにやしていた。

大通りの交差点で信号待ちをしていると、淡々と走ってきたジョガーがその一塊の端に加わった。隙のないランニングウェア、夕暮れだというのに熱帯魚めいた色合いのサングラスを掛け、ストイックな横顔で足踏みしている。そのくせ信号が変わると、にわかにくぐったり歩きだすのだ。

「お父さん」

私は声をかけた。クリーニング店からの帰りだった。

「おう。亜季か」

肩で息をしながら父はサングラスを外して笑った。両親は家の外で偶然会う自分の子どもを察知するのが異様に遅い。私たちは並んで横断歩道を渡った。店を開けそうなほど凝っていたハーブの世界から足を洗い、父はいまや走る人である。

銀行の近くまで来たときだった。見覚えのある姿に思わず息を縮めた。エコイベントで出会った刺青女だ。暗い赤のストールをゆったり羽織り、裾だけが絞られた膨らみのあるパンツの膝を曲げて、ガードレールに腰掛けている。背を少し丸め、夜気にほっかり浮かぶような格好だ。スマートフォンのタッチパネル上で指を弾ませながら彼女が喋っている相手は、ビラの束を手にした紺色ジャンパーの男だった。男はガードレールから少し体を離して立っていた。親しみ深くはないが会話はし慣れている、という間柄に見えた。

私と父が通りかかるとき、彼はいつもどおり優しい顔で無差別にビラを配ろうとしただけだったし、女の方はもし顔を上げれば私を思い出したかもしれないが、うつむいていた。でも私は足をとめて父に言った。「すぐ追いかけるから」

父は目を丸くして、娘の友達にしては年嵩の二人を順にじっくり見つけたが、関係を問うことはなかった。「もう暗いんだから気をつけてな。鍋までには帰れよ」と私に微笑みかけて通りすぎた。

夜を動かすような、つやつやと張りのある風が吹いていた。進路どうするの、という先週の担任の声がよくえった。刺青女は「あ、また会えた」と楽しげに言った。

「お父さん？ 似てるね。君この近所の子だったの？」

「知り合い？」男が口を挟んだ。

「こないだのイベントでうちのパン買ってくれた子だよ」

女が言うと、男はややなめらかすぎる印象の切れ長の目を細めて「う

れしいねえ」と笑んだ。二十代半ばと思うが、茫漠ぼうぼくとした身なりのせいか年齢まで霞んでいる。

「私は細野節子ほそのせつこ、この人は室木さんむろき。私がサイト担当で、こっちが実地の広報担当」ガードレールから降りた彼女はそう言い、乾いた小石をカタンと置くように付け足した。「イーダ会の」

この小石は私が拾わない限りきつと繰り返し私の前に置かれるのだからという気がした。私のどこかはずつとこの会にひかれていいるのだから。エコイベントの店先で彼女を振り切ったのは、ひかれていいる気持ち以上に、もう失望したくなかったからだ。しかしポケットに仕舞うにしろ遠くへ投げ捨てるにしろ、まずは小石を拾うしかない。五、四、三、二、一、と目に見えぬ担当が私の後頭部を手のひらではたいていた。私は刺青女の目を見て言った。

「生まれてから三年くらい、記憶が残ってない頃って、ただ事実としての私って感じがしていいなと思うんですけど」

「うん」

「世界と未分化だったあの状況みたいなものですか。イーダって」

「たまげたね」室木は白目の部分を大きくして笑った。「そうなんだよ。でも、この世界で、たった一人で、『自分』にしばらくつけられた意識のままではその状況には戻れない。志を同じくするたくさんの人たちと一緒にだからこそ、その中で互いを解放しあい、未分化に戻りうると思うんだ」

「くるくるに」

女が言った。彼はいつのまにか痩せた広い手でビラの束をきつく巻いていた。室木は気にせずつづけた。

「ゆくゆくは自給自足の村を作りたいと思ってるんだ。その中が完全に機能している一個の共同体に、自分が組み込まれ、分がちがたく結びついている。もう無理に自分を完成させようと躍起にならなくていい。そんなものはいつまでも実感できない。結局誰かのジャッジを待つだけだ。みんなが一個の完全を体現する暮らしの中でこそ、誰に評価されるでも

なく自ずから満ち足りるはずだよ」

「でも電気もガスも水道もなし？」

思わず私が言うのと女は笑った。それから言った。

「個になる前に戻るのもいいけど、私は、個の向こう側へ進む方が面白いと思う」

電気や水道の不使用だけでも難儀なところへさらに向こう側とは何ごとかと思った。しかし戻るよりは進むという方が進路らしさはある。室木は刺青女に向って口をひらきかけたが、「それってやっぱり自分以外のひとが必要なの」と彼女は遮るさへきように言った。彼は結局黙ったまま、伸ばしても伸ばしても円筒形に戻ろうとするピラを逆さまに巻いた。線路の響きで高架橋を見遣ると、車体は薄闇に紛れ、四角い灯りの列が長々と走っていく。女は落ち着いた声で言った。

「私たち不定期に集まってるの。次がいつって決まってるじゃないんだけど、メール送ってくれたら日時が決まり次第知らせるよ」

「細野さんに送ればいいんですか」

「ここに書いてある」

女は室木の手からピラを一枚すりと抜いて寄越した。

「あと、セツでいいから」

私はうなずいた。なぜか首が痛かった。何かに対してこれほど急いでうなずいたのが久しぶりだったのかもしれない。

佐原さばらさんが駅や商店街に程近い地域に住んでいるのは、必要最低限の移動だけで暮らしを維持したいからだそうだ。この間ドラッグストアに行ったとき、外で貼り紙をしていた俊子としこさんから聞いた。移動距離が長ければその分、落書きや具合の悪そうな人やざらりと倒れた違法駐輪など、「瑕疵かし」を見る機会が増えてしまう。私が同情すると、俊子さんは「あの子はでもしたいことを貫いてるわけじゃん。我慢ゼロで」と呆れ顔になった。彼女は他に、彼が定期的に商店街に行く曜日まで教えてくれた。

「土曜が特売日なの？」私は言った。

「近くのスーパーがね。商店街の客が少しでも減りそうな日を狙ってるよ。ほんとにいやな弟」

弟そっくりの顔で捨てぜりふを残し、蛍光色エプロンの彼女はレジに戻った。

よく晴れた土曜日の午後、母から買い物物を頼まれた私は商店街まで足をのばした。相変わらず客足が少なく、シャツターを閉めたきりの店舗もちらほらと見かける。本来なら家の近くのスーパーでこと足りる用事だった。俊子さんから弟の出没時刻までは聞いていない。それでも私は来てしまい、佐原さんは八百屋の前でへなへなのエコバッグをぶら提げて立っていた。彼は店主が新鮮だとか安いとか言って勧める野菜には見向きもせず、まっすぐに舞茸まいたけの籠を凝視して「それを一皿」と言った。青いタートルネックのセーターを着ていた。私はゆっくりと近づいた。

かつてのような固定したイメージを帯びていない佐原さんは、そのときどきで私の心を変形させる。ある時は彼の姿にほっとするし、ある時は悲しくなる。しかしそのいちばん底を流れている感情は、苛々と泡立っている気がする。この人のいることが、落ち着かないのだ。

ゴム紐で店先に吊り下げられた籠を自在に引き寄せて、おじさんがおつりを取り出す。受け取る佐原さんの隣で、母からは頼まれていない生姜しょうがを買った。彼は一瞥しただけで、店を出て先に歩き出した。

彼はその後乾物屋で昆布と春雨はるさめと干し椎茸しいたけを買ひ、豆腐屋に寄り、荒物店ざるで笹ざるの品定めをし、他に蕎麦と上白糖じょうはくとうなど買った。妖精みたいなその買い物に私は勝手に付き添った。これでは俊子さんが弟宅へ肉類を運ぶはずだ。私は一步下がったところから彼に色々と話しかけ、彼も相槌あいづちは打ったが、舞茸を要求するときのような真摯な目をこちらに向けてくれることはなかった。目の前にいる人に何も届かない。

そのうち、遠くからずっと耳に響いていた誰かの大声の内容が、聞き取れるようになっていた。数メートル先にその若い母親と幼稚園ぐらいの男の子の姿があった。「お前のせいだ」「お前のような子を連れて歩く

のは本当に恥ずかしい」、重たげな生地のスカートをはいた地味な母親が、たえまなく子どもを罵倒しながら歩いている。大きいが抑揚のない彼女の声からは自然な感情というものが読みとれなかった。言葉を切斷していくように、一語一語が克明すぎる。子どもは前をまっすぐ向いたきり全然頭を動かさずに歩いていた。私は佐原さんと一緒にいることを忘れ、できるだけ耳を傾けないように歩いた。

足取りは私たちの方が速かった。親子連れと並んだとき、佐原さんは彼女の方を向いて「殺すぞ」と言った。とてもさりげない声だった。実行へ移さない方が不自然なほど。私は驚いて立ちどまりそうになった。彼はそのまま歩みをゆるめなかった。

彼女の表情も子どもの表情もまともに見られなかった。罵声のやんだ商店街は、奇妙なほど美しく見えた。ラッシャイラッシャイというかけ声、魚屋の店先の発泡スチロールから路上になだれた氷とそこへ差しこむ陽射し、強い風にいっせいに揺れる造花の列、遠い産地の記された段ボール箱、つやつやと光を載せた林檎、古い秤。アーケードの向うに広がる空の青に映えて、さあつと甦ってくる。

彼は不快だったただ、あの親子の問題に何ら関与したわけではない。わがままな佐原さんの単なる一時しのぎで現れたその美しさに、魅了されるのは、本当はこわいことかもしれない。

佐原さんはアパートが面する道を素通りして商店街を抜けた。信号が変わるのを待つ彼に行き先を尋ねたが、彼の声は耳の中でなぜか蒸発した。聞き返したけれど、彼がフランス語か何かで答えたとしか思えないほど聞き取れなかった。答える義務感はあるも伝える意志がないのだろう。私もまた、引き止める理由もついていくきっかけも、思い浮かばなかった。それなのに口走っていた。

「寝るとこわい夢をたくさん見るんだ」

信号は変わったが佐原さんは動かなかった。私の頭上の何も無い辺りを見据えていた。私は言った。

「私は建物のずっと上の階にいてね。螺旋階段の下からものすごい悲鳴

が聞こえるんだ。私が下りていく間中、悲鳴は続いているの。螺旋階段を下りきったら、死体があった。そのとたん、叫んでた人が急に静かになって私を指差して『あの人が殺しました』ってふつうの声で言うの」

首がちくちくするのか、彼はターゲットルネットクの中に手を突っ込んで掻きながら、私の肩から少しずれた空中を睨みつけていた。私は彼の目の下についた隈を、自分のもののように眺めながらつぶけた。

「私が殺されることもあるよ。でも影だけがまだ生きてるの。私は濃い灰色の、斜めに伸びた影になって、薄茶色い壁をするする伝って移動してるの。最初は状況が飲み込めなかった。壁伝いに、大きな洗面所へ行って、鏡に映った影を見てやっと了解するの。洗面所には口紅を塗っている女がいてね、その人がさっき私を刺し殺したんだよね。グレー一色の斜めの形になってるのに、彼女は鏡越しに私だと気づいて、またバッグからナイフを取り出して刺してくるの。でももう壁が傷つくだけなの。私は、どうやったらこれ以上死ぬるのかわからなくて壁にじっと貼りついているの。じきに女の人は気が狂ってしまう」

「寝るのやめたら？」

彼は言った。私は笑った。

「最近どんな夢見た？ 佐原さんは」

「覚えてない」

「思い出したら教えて」

私のわがままだけはきくという、彼の固定観念を忘れてそう言った私が悪い。台所で生姜を揃らおろしていたその夕方、佐原さんから『私が昨夜見た夢を思い出しました。』という不気味に長い件名のメールが届いた。この携帯電話は一昨年の誕生日プレゼントとしてもらったため、私の誕生日には必ず居合わせる宿命にある佐原さんと、なりゆきでアドレスを交換したのだった。やりとりをしたことは一度もなかった。メールだとなぜか丁寧語になるらしい佐原さんは、次のように書いていた。『夢の中で私はとても体が重いのです。旅館みたいな見知らぬ建物の、黒光りする廊下にいます。どうしてこう重いのだろうと右腕を上げてみ

ますと、私の右腕よりも右にある部屋がみな、腕を傾ける速度や角度に従って盛り上がるではありませんか。畳も床の間も、襖も欄間も。左足を一歩進めますと、左にある全ての部屋をズズズと引き摺るので。間取りが、私の動きに連動している。呼ばれたような気がして振り向くと、臍の辺りを中心として、渦巻くように間取りが変形します。踵を返すと、旅館中の左と右が入れ替わります。この連関は今や建物の外にまでつづいている、体がいよいよ重くなるからいやでもわかる。その世界はあますところなく私の衣なのです。

こわい夢を見ているのはあなただけではありません。』
最後の一文は二度読んだ。私を諫めているのか励ましているのかよくわからない。私は右腕をゆっくりと上げてみた。世界はじっとしている。耳鳴りがした。右腕をおろして生姜の残りを挿した。私は佐原さんの中の階段を不注意に下りたみたいだったし、下りさせる佐原さんもまた不注意すぎる気がした。この階段を下りたら佐原さんの死体があるのではないかと怯み、ちがう、それは私の見た夢だと思い直す。今この瞬間も彼がどこかで呼吸していることが落ち着かなかった。カン、と受け皿の縁におろし器を打ちつけて、残っている生姜の繊維を内へ落とす。台所の小さな窓の擦りガラスが葡萄みたいな色を含んでいる。

夢を覚えてもらったお礼のメールを打った。少し迷ったけれど最後にこう書き加えた。

『イーダ会ってごぞんじですか？』

私はまるで、自分と佐原さんをまとめてしまいたいみたいだ。しかし実際、遊園地に行こうとか映画を見ようとか誘うよりは、入会を促す方が現実味があった。ワンピースのポケットに携帯をすべり込ませ、レシピもなく第一飲んだこともない生姜湯を、イメージだけで作り始めた。

朝の坂道を転がり落ちてきたのは、つやつやした蜜柑二つだった。今しがた私を追い抜いた自転車の、荷台にくくりつけられた薄茶色い紙袋の穴から、今また一つこぼれる。腰を浮かせ肩もいからせて上り坂をこ

いでいるおじいさんが振り返る気配は全くない。

「蜜柑落としてますよ」

私は声を張り上げたが、おじいさんはぐんぐん上っていくし蜜柑たちは頓着のない風情で落ちていく。小さな円い影が跳ねながらくっついていく。私たちのほかに人通りはない。もしやろうと思えば全力で駆け上がった、自転車呼びとめるやいなや駆け下り、落ち蜜柑の救出をこなすことだってできる。でも私は歩調を変えなかった。もういいんだ、透きとおった佐原さんを世の中のいたるところに見つけなくていい。善に、もう義理を感じなくていい。後ろ手を組んで歩いた。頭の中がみしみしと鳴るみたいだった。

分譲住宅群の建設中で普段は工事の音が鋭く響くこの道も、日曜はひっそりとしている。やろうと思えばできる善行をしないでいるのはスリリングだった。どこで線引きすればいいのかちっともわからないわけだ。もし落ちてきたのが年金手帳だったら私は拾っただろうか？ そんなことを私が決めていいのだろうか？ 試すように、誘惑するように、人はなぜか私の前で物を落としていきたがるが、今までの私は判断なんてまだるっこしいことはしなかった。腹痛の最中でも拾って疾走である。

昨日佐原さんからは結局返事が来なかった。あのあと私はイーダ会へ、氏名だけのメールを送った。『亜季、連絡ありがとう。集会の日時が決まり次第しらせる』セツの対応はすばやかだった。

坂の上に着くとおじいさんのうしろ姿はもうどこにもなかった。石堀の向こうで誰かが吹いているらしく、シャボン玉がぬめぬめした輪郭で漂っていた。私は腕時計を見た。もう両親は家を出たはずだ。今日は彼らが楽しみにしている、月に一度の「手作り市」が市役所前でひらかれる。誘われたが、用事があるからと断った。その架空の用事のために家を出てきたのだ。もちろん実際には何も無い。文化祭の打ち上げとしてクラスの皆でボーリングに行く日だがこれも断つてある。なんにも予定がないというのは結構すごい眺望だ、死までのスケジュールが、すかっ

遠く竹の葉擦れの音がしていた。竹林の方に沿っていけばやがて史乃の家にたどり着く。私の髪を掴んで引き寄せ、死ぬと言った彼女の、濃い目の色を思い出した。中三のとき史乃に「当番」を回さなかった私が、彼女にとってそれほど悪になっっているなんて知らなかった。けれど今だって、もしあのおじいさんを呼びとめて蜜柑を渡し、その時間のずれのせいで彼がたとえば衝突事故を起こしていたら、私は悔やむことになるだろう。何が善で何が悪になるかはいつまでたってもわからない。どちらにもなるものたちを、小さく小さく折り畳んで膨大に所有しているのだ。生きている間じゅう、この体の内に。

高いところはわりと好きだ。小さいときは木登りやジャングルジムの遊びが得意だった。「高いところにのぼっていく自分」以外の自分を地上に置いてきた感じ、あの軽さには格別のものがあった気がする。今も観覧車があれば乗るし塔があればあがってみる。いつもと違う高さの視線になると、気持ちがあつとされる。

それでも今いる、校舎の屋上の手すりの外側などは論外である。ここまでですつとするつもりは毛頭ないのだ。

呼び出したのはもちろん史乃だ。五時に来いと言われたので、それまでは近くのドーナツ屋で紅茶を飲んでいて。十二月に入ってまもない、乾燥した寒い夕方だった。史乃は先に着いていた。時間に几帳面な人なのだ。私に気づくと、操作していた携帯をぱたと閉じて仕舞った。カラフルなデコレーションメールの画像だったと思う。暗くさえた青があたりを染め、史乃の顔と腿と手のひらだけが浮かび上がるように白い。

私たちのいる校舎は俯瞰するとコの字型をしている。建物に囲まれたスペースには、大きな蘇鉄を中心としてベンチや掲示板が配されている。史乃はまずコの字の始点にあたる角に連れて行き、柵を越えるように命じたので、私は越えた。とたんに頭がカッと熱くなり、鼓動がけたたましくなった。周りの風景は、見えない手で解像度を変えられたようにぎっしりとときめ細かく見えた。近くのビルの六階で蛍光灯が消え、住宅街

にある一軒の家の窓に灯りが点くのがわかった。遠い畑やビニールハウスが青の底に沈んでいく。どっしりと黒い山並み、ところどころを光る糸で刺繍した紺の帯みたいな川。彼女が折にふれ私に与えてきた、さまざまな臨場感のなかでも、これはずばぬけていた。私は両手で手すりを握りしめた。柵を挟んで私は彼女と向き合った。彼女は次の指示を出した。ここからちようと反対側の角にゴミが置いてあるから、コの字に沿って拾いに行けと言う。私は一応頭の中で反芻してみたが、印象は同じだった。本気で無意味だ。

史乃はもうわかっているのだろう。「あの角にはあなたが絶対に失いたくないはずのものが置いてある」と脅すのと「ゴミが置いてある」と言うのとで、私の行動が変わるわけではないこと。理不尽が理不尽にならないこと。私が無意識に彼女を使ってきたことを。だからこそもし私が、こればかりはどうしてもいやだと言えば、今回のことはそのまま、史乃から私への処罰という形に置き換えられるだろう。それをおそらく彼女は望んでいる。

四階建てだから、十五メートル程あるのだろうか。ここから大蘇鉄まであまりにもすっからかんの足もとを覗き込んで、少し笑ってしまっただ。それから歩き出した。まっすぐ歩いているのに体の中がゆらゆらした。利き手ではない左手で柵を持つしかない。汗が滲む手のひらについてできるだけ考えないでいようと努めたせいなのか、一度だけ意識せず立ちどまって左手を離し、スカートでごしごし拭いてしまった。自身の中ぐはぐさにハツとして手すりを握り直し、思わず史乃の方を見た。さすがに彼女もはりつめていた。

コの字の内側を手すり沿いに進んで最初の直角で折れ、中間地点をすぎた。どこかの部活が終わったらしく校舎から人影がこぼれた。バイバイ、という女子の余裕たつぷりの声、おう、と照れたように返す男子の声、明日は材料費忘れんやと笑う教師の声、先生が払っといくても僕の方は構いませんと澄ましている声。誰も屋上を仰いだりなんてしない。風がスカートの裾をゆったりと持ち上げる。気がつくとは私は、

あまりの胸苦しさに右手で鳩尾みそおちをさすりながら歩いていった。内臓を掻き分けてせり上がってくるような勢いが、そこにあった。それは死への恐怖というより、死そのもののような感じがした。歯も舌も、湿ったまま冷たい。自分の息遣いが頭の中でおかしな具合に反響している。

以前から、自分との距離関係が全くわからないところに、絶えず消えつづけている場所があるのを察することがあった。私の死なんじゃないかと、そつと思っていた。でもそれは私がずつと含んでいたのだ。今こんなにもせり上がって私を内側から圧迫している。

足を、とめそうになった。あの会の人たちと同じ刺青を入れようとして、佐原さんに執着したりするのは、生きていくことの根拠のなさから守りたいからだ。けれどその必要はないのかもしれない。そんなことをしたって足りそうにないほど、私はすでに死を含んでいる。

半ば押し上げられるように、歩きながら私はここよりずっと高いところを仰いだ。紺青の空はしんと引き締まっていた。広々とした平らなグレーの雲が風に運ばれている。生きたまま含んでいるこの死が、必ずしも私を消し去ろうとしているとは思えなかった。むしろこれは、これに伯仲するものを要求してくるみたいだ。

——どうも君って、まるで本当にここにいるみたいなのに、見えるだけだね。

セツ、私もそう思う。でも佐原さんが言うとおおり、何ごともなかったかのように元通りに戻すことはできない。たった十六年分とはいえ私の内にはあまりに多くの、悪としても結実しうる行為が、折り畳まれてひしめいている。そしてそれだけが、「伯仲」しうるものだという気がする。

次の九十度の内角まであと数歩というところで、ふと私の足はとまった。角めぎして直進していた体の正面を外側へ斜にする。それから、空中を挟んでこことちようど対称をなす位置を、向こう岸に見定めた。甲高い声で史乃が何か言っているが、私は今度は眼下の、青々と深い十五メートルに集中した。

——意識のあるまま生れ落ちてみるもよし。

セツ、できるかどうかわからないけど、とりあえずやってみる。あやふやな結び目を改めてきつく結いたいなら、一度解かなくてはならない。私は手すりから全部の指をほどいて擦り合わせた。飛距離が足りなければおしまいだし、弾みをつけすぎて向こうの柵でもんどりうってもおしまいだ。深呼吸をした。竦^{すく}みそうな足首をゆっくりと回す。

柵沿いに歩いてコーナーを曲がるのではなく、対岸まで飛び移れたら。虚空を渡ってあちらの手すりにしがみつくことは、この命を繋^{つな}ぎとめることだ。十四年前に佐原さんがしてくれたように。こわばった冷たい手首へ交互に息を吹きかける。誰の目にも、命を粗末に扱う遊びとしか映らないと思う。でも自分で繋ぎ直し、確定するために、こうする必要があった。体の奥、小さく折り畳まれてひしめいている膨大なバネをいっせいに解除するように、私は向こう側へ跳んだ。

〈続く〉

牧田真有子（まきた・まゆこ）

80年生。「椅子」で「文学界」新人賞奨励賞を受けデビュー。人が抱く寄る辺なさと、世界が孕む不確かさを、丁寧にすくいあげ描きとる。主な作品に「夏草無言電話」（『群像』09年5月号）、「予言残像」（『群像』10年6月号）、「今どい?」（『WB』20号）、「合図」（『早稲田文学記録』増刊「震災とフィクションの『距離』」）など。

早稲田文学・オン・ウエブ

copyright by Makira Mayuko 2012

published by wasedabungaku 2012